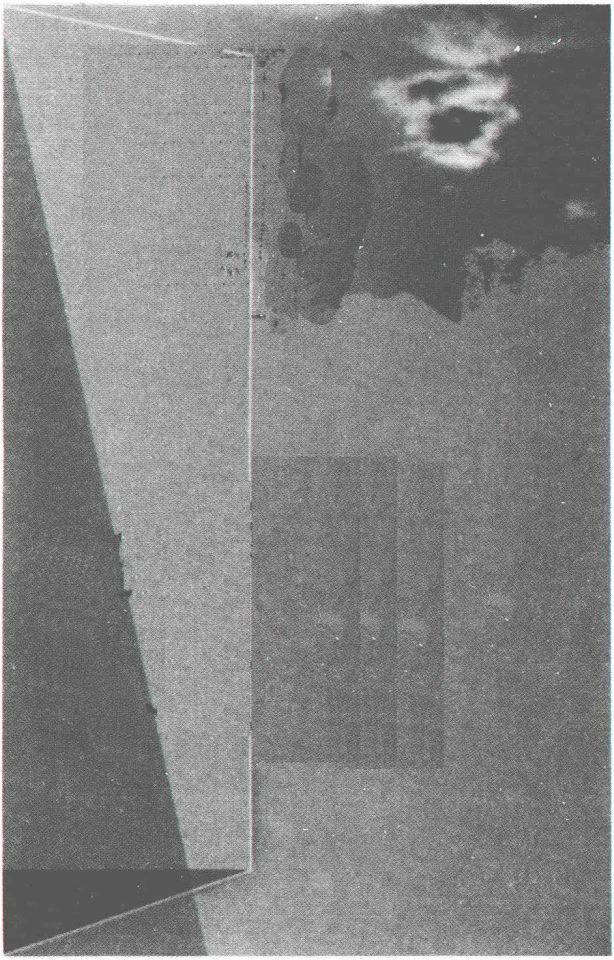
夢日記

島尾敏雄

夢日記



島尾敏雄

河出書房新社

夢日記

一九七八年五月二十日初版印刷
一九七八年五月二十五日初版発行

著者——島尾敏雄
装画——三尾公三
発行者——佐藤晧三
発行所——株式会社河出書房新社
〒162 東京都新宿区住吉町95
電話(03)355・5311(営業)／355・5321(編集)
振替東京0—108802

印刷——多田印刷　製本——加藤製本

定価は函に表示してあります

夢日記

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

昭和四十三年

三月六日

開高健と会う事になっていたので出かけて行くと（ひとりでなく、つい、連れをもうひとり連れて行った。自分ひとりの方がいいと思いつつ。小川国夫のようでもあったが、彼ならついて来るかどうか）、開高の横にも知らぬ者が二人いた。目挨拶して開高と関西弁で話すが、どうしてかうまく使えぬ。彼は昔の感じのままで対応していたが、写真か何か古い資料のファイルをなつかしそうに見せたり（ちょっと無理のようにも思え然し彼の本来の性格のようでもある）、一向話しが本題にはいらぬ。二人でゆっくり話したいなど思っていたようなのだが……

三月七日

軍隊から休暇で帰っている庄野潤三の所に行く。中二階かはなれのような所で原稿を書いている。そばを通って奥の方に行く。誰もいない。勝手にはいってきてしまったと思い又彼の所にもどり、荷物を置いといてくれと彼に言った。彼の創作の仕事は世間での手答えがあると思っている。

彼は今、ネン画（？）をやっていて、とてもうまく書けると自讃して書いてみせた。何か果物（うめ干？）のようだが、立体的にもりあがったような絵だ。

三月十日

海軍の時の夢。

三人ほどの同期生と魚雷艇のようなものに乗って湾外の方へ。エンジン、ストップ。流れていると巡視艇が急旋回してそばに平行して接触しながらナニゴトかときく。なぜかあわてて、へさきの方にぼくなどひざでにじりより、何と言っていいかと緊張していると、へさきにいた一人が、湾内を動いてクンレン……と言いかけると、向こうの士官がそうかクンレンか、と了解したようだ。ぼくがタッチャククンレンですとつけ加えると、うなずいて離れてしまう。

エンジンやっとかかって動き出すが、何やら脱走の気配生じ、なぜ、その時正直にエン

ジンがストップしたと言えなかったかと思う。二人は逃げる事のみ考え、ぼくは自首を主張するが、そのまま動かして行き、いつか陸の上を動いていて神社の境内のような所に行き、どう隠れようか、或いは自首して出るか、思いなやむ。

？

庄のの夢。

生活の装置、シュンカンユワカシ器のようなもの。

手のとどかぬところで着実な生活の充実、こっちは原始的な生活。

四月二十五日

ミユキ。

七月二十四日

右はぎのところに黄色い粉がいっぱいふいている。部屋のあっちこっちにいっぱい落ちている。それをミホに言う。

八月一日

職員と宴会、庭で。ビールがまわって色々さわぎ声を出す。ミホも加わっている。

分館長は物まねがうまいから……のまねをしてくれという、そんなフンイキ。

メエーときこえる。あとで又メエーと何か庭の中にはいってくる、ヤギなり。ヤギじゃないかときくと、ヤギですとそのヤギは言い、鳴き方がかわいいから、かわいい鳴き方だと言うと、私はかわいい鳴き方のヤギですと答えたのでみんなで大笑い。飼ってもいいなと思う。

外庭の垣根から人が二、三人、いや四、五人もはいって来ようとする。求が島口で何の用かとたずねると、本を返しに来たと言ったが本を持っているようでもなく、どんどんはいってくる。職員三、四人そちらの方に行く。やや険悪。求がポリバケツのごみを持って裏の方に走って行った。ミホが、その人たちをとめなければだめじゃないのと言うのに背中を向けて走って行ってバケツの中のものをまきちらしている。

闖入者は裏門の方に来て、イタケダカ。何か怒っている。われわれをブジョクして笑ってけしからんと言う。

いったいどういうことなのかわけがわからないと言うと、あんたたちはさっきからわれわれを笑っていたのはなぜかと言う。職員同士のシンボク会をして笑っていたのだ（ヤギの事も言おうと思ったが通じそうにないのでだまっていた）、笑っていたというが何と言って笑っていたかときくと、ただがやがやバカにした調子だという。あんたたちが何をし

ているのかもわからないのに笑うわけがない。青年をつかまえ（二人）、わけを話してほしいと詰め寄った。何かグループの会合をしていたらしい。そこにわれわれの笑い声がきこえたので頭に来て闖入してきたらしい。どんなふうにブジョクしたかもわからずにはいりこんで来てメイワクセンバンだと抗議すると、年配の者がそばに来て坐りこんでしまう。わかればいいとは思ったがそれは口にせず相手にあやまらせようと思う。彼らのはじめのいきおいはなくなっている。

九月三十日

こっちの部屋にぼくたち一家が眠り、うしろの部屋に天皇一家。天皇はきさくに歌をうたっている。即興の歌。どこか童謡調。自分の子どもらにうたってきかせている。皇后もそばにいる様子。なぜこんな状態が生まれたかふしぎだ。家のつくりをよく見ておこうと思う。

又

……夫人の家で話している。うまくもとのサヤにおさまりそう。あとで……に話すと、戻ってもいいという。……夫人喜ぶだろうと思っている。

又

屋上庭園に行こうとする。エレベーターに乗る（何人かと）。途中でおろされる、リクツをつけて。しかし次のリフト一向あがって来ない。そのフロアは階段がなくて、人家になっている。部屋を通りぬけてようやく屋上に出る。ビアーガーデンのような、下界の周囲を女の子たちと(誰かわからぬ、女子短大生のようでもある)、何という事なく見ている。

十月一日（？）

図書館が学校校舎のようになっている。休館日なのにあちこちの部屋に出入りする者が多い。休館はそれを守ろうと思う。求に休館日は休館日らしくちゃんと制止しなければいかんよと注意するとだまってついてくる。子どもたちの居る部屋には今日は休みだからおかえりと知らせ、彼らがのろのろ出るのを見ていた。中学生のたくさんいる部屋に行って、休館だからはいっちゃいけないんだと伝えると、求がふるえ声で同じことをあとから言ったので中学生たちが笑った。入り口に立っているとしぶしぶ皆出て行く。廊下に出ると、小学生の修学旅行の団体がたくさんはいって来ていて窓などに腰かけている。あれを追い出すにはかなりのエネルギーが必要だなと思う。どうして追い出さねばならぬかというひるみもある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

十月九日

目の前に男二人に女ひとりが居た。突然土地がこねられはじめ、冗談と思っているうち、大きな石の下に女がのみこまれてはいって行く。早く引っぱりあげなければと思っている。

十月十一日

後藤三夫、伸三、マヤと田舎に行っている。ひとりで行った方が都合いいのについ連れて行った。後藤には別の計画があるらしいが、はっきりきいていない。伸三はいいとしてマヤをひとりにするわけに行かぬ。しかし大井で話しをつけるには早くぼくひとりで行った方がいい。予定が立てられないでいると、キヨちゃんがお茶を持って来た。珍らしく化粧して着物もよそ行きの（どうしても田舎風だが）ものを着ている。

十月十七日

曝書。ワキノがハギワラをしばっているので、どなった。碁をしている者がいる。アナタたちはドナタ、ときく。彼ら帰ろうとする。ワキノがそばに来たが相手にしなかった。ハギワラぼくの荷物を持とうとする。

庭に子どもたくさんはいってアトランダムに遊んでいる。追い出す。おとなまで居る。ここは図書館だ、と言って彼らも追い出す。

十一月十七日

今の旅行記にはヤマがない、おんなじことのくりかえし、おもしろいところだけ力を入れてかいてあとはとばした方がいいのではないか、と恵原さんが意見を言った。

若い夫婦の家、そこに恵原さんがつれて来た。ぼくは何か講演をしたようでもある。信者の家のようなのだ。細君の方は分離のとき……だったと恵原さん言う。よくききとれぬ。立法議員だったということか。若手の議員だったのだな。ほこらしそうな顔。そのあとでぼくのそばに立ち背中を向けてスカートをたくしあげるようにして何か言って笑ったが、言葉の意味ききとれぬ。あと夫と二人で何か用意をしている。

十一月十八日

キヨ。

学生風なヤクザ。

バス停での

殺人。

純心校長が居る。くだらない所に才能があるのですねと言っている。マヤがいる。

ルカ神父が、金曜日にミドウに来いという。円座している。
家の前のザクロの木に子どもが沢山のぼって取っている。出て行って叱る。いったん逃げるが（反抗的な逃げ方）又来て、それはその子どもの家のものだと言う。
うまくもの言えぬ。
サイデンスティッカー夫妻が泊っている。もうひとり外人女が泊っている。疲れて寝ていると彼女が来て、このごろ疲れているのではないかと言う。

混血児の夢、もう覚えていない。
階段式ストリップ劇場にはいって行くと観客の多くが、チンピラ。喧嘩をはじめる。おそろしいが逃げもならぬ。

十二月十六日

ベトナムの踊り。三人のベトナム少年。踊りの前にからだをあつくする前戯と称して耳をさわったり、顔をさわったりしている。
三人とも全裸、うすいしげみ。この部分とこの部分が1/3ずつ、そして真ん中が1/3だと観衆に公開している。さて本番にかかろうとしてあと曖昧。
開高がベトナム娘を連れて来る。はじめ娘にインタビューする場面。少女は下ばきをし

ていない。開高が頭を持ち、ぼくが足を持ち、左右に開閉する。少女は苦にせず修行の顔つき。開高ひとり階下に行き、又あがって来る。向かいの家の二階が気になりカーテンを少し引くが、見られてもいいと思っている。見ているすがたも感ず。こちらの家でも誰が上がってくるかわからない。

十二月十八日

ミホと旅に出ていてもう帰らねばならぬと思っている。駅を歩いてくるとチンピラがすれちがう。ちょっと目を動かしたら追って来て、今の目つきは何の意味だとぼくの片頬を軽くたたいて行き過ぎる。彼の仲間が沢山居るようなので、がまんして通り過ぎる。もう一度戻ってくると相変わらずチンピラはたくさん居る。駅員はなぜ取り締まらぬかと思う。中学生のようなのが追って来て金をせびる。一対一となると説得できそうに思うが、思いかえして金を与え、電車に乗る。

電車をおりると、和ちゃんの顔が見える。気がつかぬか、つかぬふりをしている。そのままにしておこうと思う。冨士本がおりて来て和ちゃんの腕を取って並んで行こうとする。フジモト！　と呼びかけ、おれは明日帰るよと叫んだ。和ちゃんの方は見ないで。冨士本は独身だったなと思う。それもいいと思い、冨士本とゆっくり話したいきもちになる。

十二月二十日

着物を着て登校。一時しのぎだった下宿屋は変わる予定（大学に入学決定した故）。おかげさまであとがきまったなどというそこの下宿屋の主人をはじめて見た。タクシーを呼んでもらおうと思いつつ歩く。道路悪く、クソのような泥がゾーリにつく。

きたない道。誰かがおじぎして行く。

購買部のような建物。何を買ってよいか分らぬ。

入学式。大きな部屋。カトリックらしく張り出し席にスーキケイが来て（何人か）、のぞいているのだという。適当な席をとる。かげのような暗い所で運動部員が運動をしている。柔道部と女子バレー部員が一緒にトレーニング（モダンダンスのよう）。又演劇部の男女学生が nude 的衣装で練習。

いつでも出て行くきもちでいる。次の教室に歩いて行くと今井基介がいる。九州なら欧洲旅行をした学生など少ないのにここでは大きいから目立たぬなど思う。又前の方の席では当用漢字を教えている。教科書も何も用意していない。本という字、本とか本とか、どれが正しいかなどと言っている。映画館の広告が出ていて、ちらとチェコスロヴァキアの田舎の……らしく見える。あれを見ようと思う。

十二月二十一日

富士さんから手紙。シマのどこかに行ったルポルタージュ。医師や船主などとすぐ友だちになって、部落のそばに船をつけ、シニックにシマの部落の描写をしている。謄写刷りの中に書きこんでいる。

その同じ部落にミホ、伸三、（マヤも?）と行く。浜からすぐ石段をのぼる。樹齢三千年の大木を利用してその上の方に神社。そこの当主で年配の人が三、四冊の古い書物を見せる。みなその神社の縁起のような事。又ぼくの作品集一冊のカバーを見せる。名前のところに紙が貼ってあるのは誰からか贈られた別の書物のものだが、先の紙がはげたので代わりに使っていたという。中からぼくの覚えのない家族の写真何枚か出てくる。

又

風呂に行こうと思う。線路の向こうの道をミホが帰ってくる（どこかに住みこみではたらいている）。踏み切りでうまくぶつかる歩幅で歩いて行くと、少し前かがみになって歩いてきたミホとぶつかった。風呂に行くところだと言うと、ちょっと待って、と道具を取りに走り去って行った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com